

朝日歌壇俳壇



「日曜日のプローチ 37」 junaida

俳句時評 二つの六林男論

岸本 尚毅

「ねて見るは逃亡ありし天の川」は逃亡兵が出たことを知りながら、前線に留まっていた兵の思い。「射たれたらおれに見られておれの骨」は戦場の瞬間。いづれも鈴木六林男の作。これらを、川名大は「前線俳句の精華」「生と死にかかわる軌跡」「強烈な自意識を支えたリアリズム」と評した(近刊の『昭和俳句史』(角川書店))。

「暗闇の眼玉濡さず泳ぐなり」は六林男の戦後の作。これを川名は「渾身の世へしすけ」は何である」と問う。

高橋はまた「おれの骨」の句は「『おれ』が、『見る』ものと『見られる』ものに分離している」といふ。「暗闇の」の句は「『眼玉』という原初的と言ってよい生々しい身体性のクロースアップ」だといふ。

◆1月4日付の朝日歌壇俳壇面は休載します。

小島なお歌集「卵降る」 2021年から25年までの作品を収めた第4歌集。「いてもいい、いなくてもいい」選ばれし花びら散ってきみにいてほしい(左右社・2200円) 第6回BR賞 該当者なし。歌集・歌書の書評を対象に現代短歌社が主催する賞。第13回現代短歌社賞 該当者なし。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき

ぬる煙をしみじみと飲るカワハギの肝和えあてに釣友偲び (仙台市) 古谷 隆男
一時代終わったような寂しさよ娘の弁当今日でお仕舞い (東京都) 中村 容子
クマ呼ぶと柿はもがれてその幹に伐採予定のピンクのリボン (気仙沼市) 大崎 泰史
セルフレジ係が慣れぬ客につくお互い少し困った顔で (久留米市) 春日 登
☆保育所で「どこからきたの」「だれなの」と児らに言われるあやしいわたし (札幌市) 佐久間優子
高校の教員辞めて保育士ではないか人生いろいろ (藤沢市) 原島 吉光
クリスマスもお泊まり会も働き込んで青少年の家更地になりぬ (土浦市) 原田 啓子
八割が農家の里に配れという米騒動のおこめ券かな (さくら市) 大場 公史
ママだった頃の面々集まりてバーバとなりし近況語る (柏市) 長田真樹子
どんぐりの転がるように笑う子は三月三日生まれの双子 (高知県) 原 真由美

【評】第一首、釣りの友達を追悼する酒。カワハギの肝和えを肴によく一緒に飲んだのだろう。第二首、小学校時代から毎日作りつづけてきた弁当。上句の感慨、よく分かる。第三首、今は柿の木を伐採する歌がたくさんあった。

通し合ふことば無きゆゑ人と熊、在りても殺め合ふ人と人 (嘉麻市) 野見山弘子
道迷い訊ねし人はブラジル人スマホのマップの使い方教わる (上田市) 小宮美恵子
福生から八王子へと移り住み軍事機が飛ぶ空飛ばぬ空 (八王子市) 斎藤 千秋
雪吊りの円錐形は木にやさし実用の果て美となりしもの (川崎市) 小池たまき
十二月家族のいいこと思い出し乾杯をする今も昔も (富山市) 松田 わこ
米がまた配給制になるのかと真顔で案ずる卒寿の義母が (札幌市) 田巻 成男
書道ならかな文字のような演武する太極拳の憧れのひと (安中市) 岡本千恵子
☆腕時計見る間も惜しい配達時星座の座標で時間を計る (甲州市) 麻生 孝
A1の作りし歌と人の歌見分ける術をA1に聞く (鳥取市) 山本憲二郎
またやった 怪訝な顔に気が付けり米人達に日本語つかいし (アメリカ) 大竹 博

【評】1 首目、ヒトは言葉が通じなくて熊を殺し、言葉が通じてもヒトを殺す恐ろしい生き物だ、と嘆く。2 首目、日本人の私がこれでいいのか、というユーモラスな歌。3 首目、福生市には米軍の横田基地があって軍事機が離着陸している。

八歳の少女が語る「死にたい」は今のガザの日常の言葉 (高松市) 島田 章平
無視されて「ひとりごと」だと強がった君を今なら抱きしめられる (厚木市) 杉山久美子
人生を要約すればかくのごとく喪中のはがきの印刷五行 (仙台市) 沼沢 修
戸障子を池に投げ入れとんとんと腰うつ昭和の母恋かりき (大和郡山市) 四方 護
海上の見えぬ国境広げつつ西之島新島太りゆく (名古屋市) 浅井 克宏
後悔の反対語って何だっけそんな気持ちで君を見送る (横浜市) 富尾 大地
赤緑二色並んだニッキ水ある夏の日にある駄菓子屋で (伊勢市) 墨花 欣也
さびしくて誰かと話したい夜に誰かがいないさびしき夜に (朝霞市) 岩部 博道
山門のすぐ脇に立つ歌碑ひとつ相聞歌なり紅葉降り頻く (長野県) 千葉 俊彦
四貫の水を手鉤に吊り上げて運びまわりし宵の木屋町 (美瑛市) 寺澤 和彦

【評】島田さん、八歳の少女に「死にたい」と言わせる異常な状況。それがガザの日常であることを注視しつづけた。杉山さん、無視されて強がっていた君とそれを受け止められなかった私。今なら抱きしめられるのにと、微妙な心情の軌跡を。

☆腕時計見る間も惜しい配達時星座の座標で時間を計る (甲州市) 麻生 孝
大雪で家族の到着遅れると霊安室の遺体に告げる (金沢市) 竹内 一二
☆保育所で「どこからきたの」「だれなの」と児らに言われるあやしいわたし (札幌市) 佐久間優子
昏睡の母見舞う背に何ごとか訴え患者のいくつもの声 (厚木市) 本庄 伸子
解体は日本語じゃない人がいて日本の家は更地に還る (岡崎市) 近藤 義孝
軍服を縫ったミシンで新婚の母は夫の背広を縫った (関市) 今 列子
十人ほど糞係出て霜のあさ角本の黒牛の市 (津市) 中山 道治
この地区で主語は要らない「出ただけで熊だ」とわかる真面目にわかる(北海道) 飯田左智子
ママチャリの買い物籠から乗り出して世間見て行く大根や葱 (西海市) 前田 一揆
父は右翼母は左翼で私は永遠に日和れる一羽のかもめ (藤沢市) 小林 竜太

【評】一首目、秒刻みで動く体が天体とともにある壮大でリアルな感覚だ。二首目、孤独な遺体と一緒にいる極限の静けさ。三首目、子供たちにとって異星人のような「私」だ。七首目、「糞係」に現場感があり、穢めく牛と人が見える。